

夏秋トマトの全量基肥施用法

農業研究センター 高原農業研究所

担当者：桑野 伸晃

研究のねらい

夏秋トマトにおいては初期の草勢をおさえるため基肥を少なくし、追肥を中心とした施肥体系がとられているが追肥作業が煩雑である。そこで、成分の溶出量を調節可能な肥料を用いた全量基肥施用法について検討した。また、このような肥効調節型の肥料は肥料成分の流亡が少ない特徴があり、肥料の利用率が向上すると考えられるため、減肥の影響を併せて検討した。

研究の成果

- 1 肥効調節型肥料を用いた全量基肥施用については慣行の追肥を行う栽培と同等の収量をあげることが可能である。
- 2 肥効調節型肥料の肥効パターンとしては、生育期間を通して均等な肥効を示すタイプの肥料(均等溶出型)と比較し、生育初期に肥効を抑えたタイプの肥料(後期溶出型)が可販果収量が多く有望である。
- 3 肥効調節型肥料を用いた全量基肥施用では3年間減肥栽培を続けた場合にも収量、品質の低下は見られず標準的な施肥量(窒素成分で10a当たり30kg)の2~4割程度の減肥栽培が可能である。

普及上の留意点

- 1 肥効調節型肥料を用いた栽培では、肥効が一定で草勢に波がないため慣行栽培よりも草勢が弱く感じられることがあるが追肥は行わない。
- 2 生育初期に肥効を抑えたタイプの肥料(後期溶出型肥料)は施肥から定植までの期間によって肥効が異なってくるため育苗・圃場準備は計画的に行う。

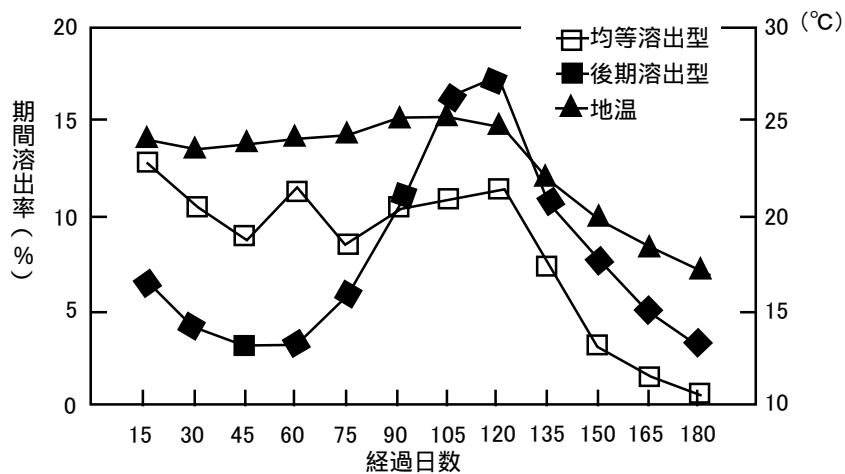


図1 各肥料の期間溶出率と地温の推移

表1 収量 (1区10株当たり kg)

	A品	B品	可販果計	外品	収量計
慣行区	28.69	3.60	32.29	6.60	38.89
後期溶出標準	30.33	3.51	33.84	10.15	43.99
均等溶出標準	27.00	1.27	28.27	10.26	38.53
後期溶出2割減肥	32.89	2.16	35.05	8.69	43.73
後期溶出4割減肥	32.36	3.95	36.31	9.17	45.48

可販果の秀品優品をA品、良品をB品として扱った。

(平成9年度)

表2 収量の経年変化 (10株当たり kg)

	H7	H8	H9
後期溶出標準	45.02	32.94	43.99
後期溶出2割減肥	46.45	33.24	43.73
後期溶出4割減肥	47.01	35.27	45.48